

はしがき

一橋大学創立 150 年史準備室長

阿部 修人

昨年度に続き、2021 年度の一橋大学は新型コロナ禍の影響を強く受けました。キャンパスへの入構制限、学園祭等、様々なイベントのオンライン化や縮小が行われました。一方、東本館の改修工事により、これまで隠れていた大学通りに面する時計台を含め、1929 年に竣工された当時の姿を取り戻すなど、よいニュースもありました。そして、ここに、無事、『一橋大学創立 150 年史準備室ニューズレター』第 8 号をお届けできたことに安堵すると共に、新たに光が当てられた本学学園史の様々な側面を知ることによる喜びを隠せません。無論、これはご多忙のなか執筆をご快諾頂けた執筆者の皆様、および編集に携わった一橋大学学園史資料室のスタッフによる努力の賜物であり、心より御礼申し上げます。

本年度のニューズレターは、第 7 号同様、10 本の玉稿に恵まれました。

特別寄稿の水田洋氏によるエッセイは、2022 年 5 月に韓国大統領に就任のユン・ソンニョル（尹錫悦）氏の御父上で延世大学名誉教授・ユン・ギジュン（尹起重）氏等、三人の東京商科大学出身者に関するものです。このエッセイは元々如水会会報に掲載されていたものですが、今回の再録にあたり多少の変更を行うと共に、大月康弘一橋大学理事による補足を付けました。

作間逸雄氏のエッセイは、2021 年 10 月に亡くなられた一橋大学名誉教授倉林義正氏に関するものです。倉林氏は東京商科大学卒業後、1956 年から 1990 年まで一橋大学経済研究所に勤めた統計学者で、学術論文を多数発表するだけでなく、国際連合統計局長として、国際間物価指数（購買力平価）の構築の陣頭指揮をとられました。作間氏のエッセイは倉林氏の研究成果に関する、学術論文としても成立するような詳細な説明がなされており、この分野に興味のある方には必読と思われます。

吉田裕氏の論考は軍事史という、戦後のアカデミズムの中で忌避される傾向にあった分野が、1990 年代以降急速に研究が進展していく様子、そして、その新たな軍事史研究において主導的役割を担った吉田氏の研究歴が書かれています。

大川一毅氏のエッセイは、御父上の一橋大学名誉教授大川政三氏に関するものです。大川政三氏は一橋大学の財政学を木村元一氏、石弘光氏と共に支えた一人で、多くの学生を指導しました。大川氏のエッセイは、ご家族としての視点、そして多くのゼミ生からの情報に基づいて、当時の大川ゼミの様子を生き生きと再現しています。

廣瀬直己氏のエッセイは一橋大学名誉教授本田創造氏に関するものです。廣瀬氏は東日本大震災当時、東京電力常務取締役で、その後取締役社長として困難な中、東京電力の経営に

携わっています。このエッセイは、中野聡本学学長や辻内鏡人・元一橋大学教授を指導された本田氏のゼミの様子や廣瀬氏の東京電力での興味深いご活躍の話しに溢れています。

森田宏之氏のエッセイは本学名誉教授の雲嶋良雄氏、および本学元教授で、惜しくも昨年亡くなられた榊原清則氏のゼミの様子、特に、沼上幹・一橋大学教授等多くの研究者を育てた榊原ゼミの第一期生として、若い頃の榊原氏の指導風景が、またその後 IT 業界で活躍される森田氏のご活躍と一橋大学との関わりが書かれています。

薩摩秀登氏のエッセイは、阿部謹也元一橋大学学長のゼミに関するものです。私事で恐縮ですが、阿部謹也は、編集担当の私の父でもあり、薩摩氏のエッセイは、母と共に楽しく読ませていただきました。薩摩氏のエッセイには若い頃の父の写真も掲載され、当時のゼミの様子がとても生き生きと書かれているだけでなく、父の学問についても、薩摩氏による鋭い考察がされています。

高橋広氏による一橋大学管弦楽団に関するエッセイは、「ラフスケッチ」と題されていますが、21 ページに及ぶ大作です。一橋大学管弦楽団は、入学式や卒業式で演奏されることが多く、本学卒業生にとってはなじみ深い課外活動部ですが、100 年以上の長い歴史を有するもので、日本全体をみても有数の古いオーケストラです。高橋氏のエッセイは、非常に多くの資料と取材に裏打ちされた本格的な記録書で、本学学園史にとり貴重な情報源として、今後大いに活用させていただきます。

田崎宣義名誉教授による論考は、一橋の今昔、という連載の三回目になり、今回は関東大震災で神田から国立にキャンパスが移転されたときの、学内の動きに関するものです。田崎氏らしく、膨大な文献を丁寧に調べ、わかりやすくまとめていただいています。特に、当時の教授会における激しい、しかし真剣な議論の様子は迫力があります。それにしても、本論考で紹介されている、福田徳三、上田貞次郎、上田辰之助、と、今となっては伝説といってよい本学教授達による、とても生き生きとした、そして真剣なキャンパス移転に関する議論は、一橋大学の学園史における貴重な記録になっています。

酒井雅子氏の論考は、商法講習所設立時に関するもので、多くの歴史公文書や資料に基づき、詳細な森有礼と商法講習所に関する記録となっています。森有礼は商法講習所の創設者ですが、招聘したホイットニー一家に対する冷遇や、その後の商法講習所経営に積極的に関与した記録に乏しいことも事実です。酒井氏による論考は、森有礼の家族の様子やその資金状況、渋沢栄一に関する資料を駆使し、森有礼と商法講習所の間の実態に迫っていく、一橋大学の学園史にとりとても貴重な論考となっています。

以上、去年に引き続き、今回も充実した内容のニューズレターとなりました。創立 150 年が 3 年後に迫り、ますます、皆様方からのご協力が必要になります。今後も変わらぬご支援をお願いいたします。